

秋播き栽培におけるエンバク極早生品種の生育特性

○桂 真昭・我有 満・後藤和美・松岡秀道
(九州沖縄農研)

【目的】

飼料自給率の向上には、土地の有効活用が欠かせず、飼料用冬作物の作付けはその役割を担うものと考えられる。その中でもエンバクは重要な選択肢の一つであり、近年においてもいくつかの新品種が発表されている。しかし、秋播きして翌春に収穫する栽培体系で、エンバク品種の生育特性を比較した情報は少ない。本課題では、夏播き年内収穫用に利用される極早生品種に注目し、それらの秋播き栽培における生育特性を検討した。

【材料および方法】

表1の15品種・系統を供試した。2003年11月7日及び2004年11月9日に播種し、それぞれ2004年4月30日、2005年5月17日に収穫調査を行った。1年目は1プロット4.8㎡(条長4m×条間0.3m×4列)、播種量を6kg/10aとし、2年目は1プロット4.5㎡(条長3m×条間0.3m×5列)、播種量を200粒/㎡とした。施肥量は両年とも、基肥としてN、P₂O₅、K₂Oを成分でそれぞれ0.5、1.0、0.5kg/a、追肥としてN、K₂Oを成分でそれぞれ0.5kg/aを播種翌年の早春に施用した。試験区は3反復、乱塊法で配置した。

【結果および考察】

表1は乾物収量が多い順に供試品種・系統を並べた。1～4の品種・系統は、乾物収量が他のものより5%以上高い値を示し、早春の枯葉程度が低い値であった。これに対し、11～15の品種・系統は「たちいぶき」を除き、早春の枯葉程度が他のものより高い値であり、早春の枯葉程度と乾物収量の間には、何らかの関係があるものと考えられる。また、早春の枯葉程度は病害との関連も考えられ、今後の検討が必要である。

出穂まで日数には品種・系統間で19日の差が観察され、145日前後(1, 2, 15), 150日前後(4, 6, 13, 14), 155日以上のもので、3グループに分けられた。また、収穫時の倒伏程度にも差が観察され、1, 4, 13, 15では倒伏がみられなかった。このような極早生品種の中でも出穂がより早く、耐倒伏性に優れるものは、収穫期の拡大や、かつて行われていたマメ科牧草との混播栽培に有利であり、新たな栽培体系の創出に寄与できるものと考えられる。

表1. エンバク極早生品種の秋播き栽培における生育特性(2年間の平均値)

		早春の		出穂まで			収穫時の			乾物率	乾物収量
		枯葉程度	日数	穂の熟度	倒伏程度	病害程度	草丈	%	kg/10a		
		1:無・微 ~9:甚		1:未乳 熟~7:	1:無 ~9:甚	1:無・微 ~9:甚	cm				
1	九州14号	3.3	142	4.7	1.0	3.0	124	26.7	1361		
2	九州13号	2.3	146	5.0	1.8	3.3	123	24.1	1355		
3	たちあかね	1.8	156	4.5	2.3	2.2	132	23.2	1305		
4	九州16号	2.8	152	4.3	1.0	2.5	123	23.7	1299		
5	エンダックス	3.8	159	2.8	2.3	2.7	150	22.0	1233		
6	はえいぶき	4.0	149	5.0	2.0	4.0	126	24.4	1227		
7	サビツヨシ	2.2	161	2.8	4.5	3.0	134	22.3	1215		
8	スピードスワロー	4.7	158	3.5	3.7	4.2	132	21.2	1200		
9	つばさ	4.2	157	3.0	8.5	3.3	153	22.6	1187		
10	極早生スプリンター	4.3	159	3.0	1.8	2.7	143	22.3	1179		
11	ウエスト	4.7	157	3.8	4.3	3.8	133	20.9	1163		
12	アーリークィーン	4.7	158	3.0	4.0	3.0	135	20.3	1153		
13	たちいぶき	3.2	151	4.5	1.0	3.3	107	25.1	1139		
14	スーパーハヤテ隼	5.7	152	4.0	2.7	2.8	143	24.7	1130		
15	九州15号	5.8	145	4.3	1.0	4.3	106	25.9	1071		